

# 第10回 鹿沼市民文化センター名作映画祭

映画史を彩ってきた監督と女優の宿命的な出会い  
数ある名作、代表作から選んだ4作品を上映いたします。



①稲妻 [1952年 成瀬巳喜男 大映 白黒 87分]  
出演：高峰秀子、三浦光子、香川京子 他  
上映時間：午前10時00分から午前11時27分



②にごりえ [1953年 今井正 新世紀映画社 白黒130分]  
出演：丹阿弥谷津子、久我美子、淡島千景 他  
上映時間：正午から午後2時10分



③伊豆の踊子 [1963年 西河克己 日活 カラー87分]  
出演：吉永小百合、高橋秀樹、南田洋子、浪花千栄子 他  
上映時間：午後2時25分から午後3時52分



④華岡青洲の妻 [1967年 増村保造 大映 カラー99分]  
出演：若尾文子、高峰秀子、市川雷蔵 他  
上映時間：午後4時10分から午後5時49分

2019年 **1月20日(日)** (開場)午前9時30分 (上映時間)午前10時00分~午後5時49分  
**鹿沼市民文化センター 大ホール**  
11月10日(土) 販売開始 **全席自由 前売券500円、当日券1,000円**

4作品ともご覧になれ、  
再入場もできます。

※就学前のお子様は入場できません。  
※当時のオリジナルフィルム上映のため、映像・音声の乱れがある場合がございます。あらかじめご了承ください。  
※当日は、軽食販売を予定しています。ぜひ、ご利用ください。

■主催：鹿沼市／鹿沼市教育委員会／(公財)かぬま文化・スポーツ振興財団／鹿沼市民文化センター友の会  
文化庁／国立映画アーカイブ

■後援：鹿沼映画鑑賞会 ■特別協賛：木下グループ ■協力：株式会社オーエムシー 木下グループ

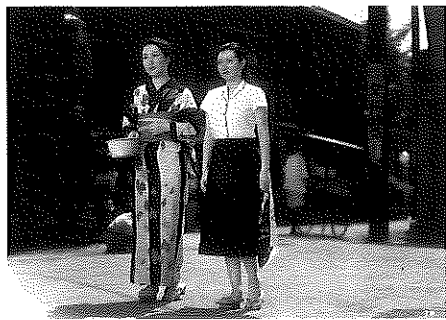
**プレイガイド**  
11月10日(土)発売

- 鹿沼市民文化センター／0289-65-5581 ●鹿沼総合体育館／0289-72-1300
- 福田屋百貨店鹿沼店(1F案内所)／0289-63-0011
- 宇都宮市文化会館プレイガイド／028-634-6244
- 日光市今市文化会館／0288-22-6213 ●栃木文化会館／0282-23-5678
- 福田屋ショッピングプラザ宇都宮店(3Fチケットぴあ)／028-623-5269

■お問い合わせ先：鹿沼市民文化センター ☎0289-65-5581

## 作品介绍

### ◆稲妻〔1952年 大映〕〔主な出演者〕高峰秀子、三浦光子、香川京子



それぞれ父親の違う四人の子供たち。母はそれをそのまま受け入れて暮らしているが、末っ子の清子（高峰秀子）は姉や兄たちの身勝手に無気力な生き方に生理的な嫌悪を抱いている。山の手の世田谷で一人下宿生活を送っているのもそのためだ。次女の光子（三浦光子）が飼っている子猫のように、弱々しい生きものとして周りの世話になりたくないのだ。林芙美子の同名小説は1936年に発表されたもので、実母をモデルにしたものだと言われている。監督の成瀬巳喜男は、戦前の松竹時代から林芙美子に関心を抱いていたが、映画化の機会をもてないままであった。この作品は『めし』（1951）に続く林文学の映画化である。下町の庶民の姿をいたずらに劇化することなく、静かに見つめているところに特徴がある。

田中澄江脚本。「キネマ旬報」ベストテン第2位。

### ◆にごりえ〔1953年 新世紀映画社〕〔主な出演者〕丹阿弥谷津子、久我美子、淡路千景



1937年に創設された文学座が、戦後その全盛期を迎えるにあたって発案・製作された作品。夭折した明治の女流作家・樋口一葉の晩年の短編小説「十三夜」「大つもごり」「にごりえ」を原作に三話構成のオムニバス形式を採り、当時新鮮な現代劇で注目されていた今井正監督が、京都映画撮影所（旧松竹下賀茂撮影所）で完成させた。役者の緊張を強いる簡潔なセットの中で徹底したりハーサルが繰り返され、微妙な計算により作り出された明治の光と闇の中に、過酷な状況を生きざるをえない女たちの一瞬が捉えられている。この年、今井監督は大ヒット作「ひめゆりの塔」も演出しているが、「キネマ旬報」ベストテンは『にごりえ』が第一位、『ひめゆりの塔』が第七位に選出されている。

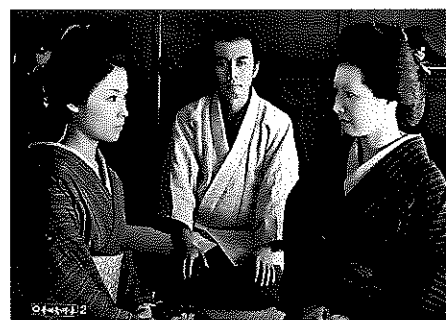
### ◆伊豆の踊子〔1963年 日活〕〔主な出演者〕吉永小百合、高橋秀樹、南田洋子、浪花千栄子



川端康成による有名な同名小説の4度目の映画化である。日活では初めての試みで、当時同社の若手スターだった吉永小百合と高橋英樹が主演した。宇野重吉扮する大学教授の回想という形式を採っているのが特徴で、現在と過去をカラーと白黒で使い分け、現代の女性と回想中の踊り子を吉永に二役で演じさせたことについて、西河克己監督はこれまでの『伊豆の踊子』と違った試みをやりたかった、と述べている。原作中の有名な台詞「いい人は、いい人ね。」を意図的にシナリオから削除したことにも、新しい「踊子」像を作ろうとした野心が表れているが、田中絹代出演による初の映画化（1933）でも、後の映画化と比較しても、全体としてはセンチメンタルな作品に仕上がっている、と言えるだろう。川端はこの作品のロケーション撮影を訪れているが、完成した作品について川端が各地で高い評価を公言したので、西河監督がかえって戸惑ったという逸話も残っている。

完成した作品について川端が各地で高い評価を公言したので、西河監督がかえって戸惑ったという逸話も残っている。

### ◆華岡青洲の妻〔1967年 大映〕〔主な出演者〕若尾文子、高峰秀子、市川雷蔵



有吉佐和子の同名原作を、新藤兼人の脚本を得て増村保造が映画化した作品。日本初の麻酔薬の開発者として名高い、紀州の医師華岡青洲をめぐる母と妻の葛藤を中心に描いている。加恵は青洲の母お継に憧れて21歳で華岡家の嫁となった。京都で医学修行を積んでいた夫が帰国するのは3年後である。やがて、加恵をさしおいて、なにくれとなく夫の世話を焼く姑は加恵のなかでライバルとなっていく。嫁と姑のひそやかな対立をよそに、青洲はひたすら麻酔薬の研究に打ち込んでいった。動物実験の段階を終えて、人体を用い効果を試すべきときがきた。その時、自ら実験台になることを申し出たのは二人の女、母と妻であった。譲らない二人に、青洲は同じように薬を与えるのだったが…。増村保造はこの映画化に

熱心で、企画会議で永田雅一社長に訴えて製作許可を得た。増村自身は、女の戦いを利用しつつ薬を完成させた華岡青洲に魅力を感じていたらしい。「キネマ旬報」ベストテン第5位。

## 上映時間

稲妻	(87分)	午前 10 時 00 分 ~ 午後 11 時 27 分
にごりえ	(130分)	正 午 ~ 午後 2 時 10 分
伊豆の踊子	(87分)	午後 2 時 25 分 ~ 午後 3 時 52 分
華岡青洲の妻	(99分)	午後 4 時 10 分 ~ 午後 5 時 49 分